

邦文一巻
完

2132
24
13



2132
24

野夫經年

穴の中あなに貉くさねありとられとねんねんと欲ほらるる

一人曰い貉くさねハ睡ねと好あむりりのあり試まし枕まくら

酒い一い種しゅ利り生せい姜しょう味み吻く一い片ぺ細さい引いんを付つ穴あなの中なか

みあうみなべなにに貉くさね酒しゅととののととくくとと枕まくらとと引ひを

一い種しゅりりるるふふををのの細さい引いんををくく縛しるる時ときハハ貉くさねと

ねねべべとと一人ひと曰いわれわれ甚た遠とほ一い井い戸ど、の釣つ瓶びん

とと煮にくく細さい引いんをを碓うととつつけけ穴あなの中なかををかかき

郷食庭

天明

まうんべー 貉^{ひよ}れ目^め鼻^びう體^{たい}の中^{ちゆう}へ引^ひけぬ
あるまうー 迷^まハ仕^し方^{ほう}あー 一人^{ひとり}曰^いふ
ひごまハ人と魅^まと獸^けなり人^{ひと}留^{とど}めあるまう
まう効^きと奏^{そう}らるるまうー 一の細^こ引^ひと
嚙^かく穴^{あな}の口^{くち}まうと線^{せん}ひきつるまう
貉^{ひよ}とつらまうとくんとまうまうー 一つもまう
貉^{ひよ}とねまうまうまうのまあまうと按^おずる小^こ後^ごの中^{ちゆう}
の病^{びやう}の中^{ちゆう}れ貉^{ひよ}あまやまうまう一人^{ひとり}後^ご世^{せい}まう其^{その}次^{つぎ}の

羅^ら漢^{かん}ハ古^こ方^{ほう}家^かあり注^{しゆ}のくまうまうまう
のまうまうの七^{しち}加^か城^{じやう}古^こ方^{ほう}まうまう後^ご世^{せい}まう
まうまうまうまうの山^{さん}原^{げん}のまう関^{かん}見^{けん}脈^{まく}ひん
くまうまう時^{とき}ハ狗^{いぬ}まうまうまうまうまう
乃^なまうまう遊^{あそ}ぶ者^{もの}まうまう駿^{しゆん}河^がのまうまうの写^{しゃ}すれ
人^{ひと}穴^{あな}のまうまうの井^い夫^{ふう}經^{けい}はまうまうまうのま
麻^あ鬼^きまうまうのまうまうまうまうまう
ち後^ごまう

阿比山人記



序

神農生^{うまれ}出^い産^うじ^うの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^る
 母^はの^う子^こを^はま^いや^まお^らる^るは^はま^いや^まお^らる^るの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^る
 お^はの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^るに^はま^いや^まお^らる^るの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^る
 同^じく^もお^はの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^る乃^はま^いや^まお^らる^るの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^る
 た^はま^いや^まお^らる^るの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^るを^はま^いや^まお^らる^るの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^る
 此^はま^いや^まお^らる^るの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^るの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^るの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^る
 り^はま^いや^まお^らる^るの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^るの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^るの^うら^う母^はを^はま^いや^まお^らる^る

手あわぢる結ハ付いりぬる金の松うせ風うぢり
義日此傳りふとこののふたあり世ま鑑と
志表されたりむもさるふ木根本皮さまけらう
のくおのらうまののまじや破ら固あるさけらう
お人周知ふさるるさしほり山に似たりとらう
いさ川にさうか丹お好り駿河井室極糸如
ほけ結糸



自序

言ものふきうんまものふらうんま
りるるさらされしる肺肝れ腐縁糸サ益と
一く彼業の末と奪よりり一ふかりり
菴師の道今世に甚ある世の辨傳お
摺り時務る風俗ハ莫知ハ鈍一ハ鉛刀
う疾とよりハ智者ハ美人ハ一人愚者ハ千人
よ子人あねし一傳聖れ其お織りかあり

御所仕のまじりに眼を濁しぬやと
まじりぬ

駿陽 東湖山人書

不仁野夫鑑

矢人ヤのあふ函人ヤより仁ニのうぎんやヤ巫ハ匠シも亦
あり故コに御ミ懐ツまをあるへくはと誅ツなるるに
まじりて特トに御ミの清シ浄ジ下カのりあは四シり市
を柳ヤのりしりまの麻マをた楮ツと銚シとを賣
商人ありかの楮ツをうらんとする時トに干カ将シ莫
耶ヤが劔ケンうらふ楮ツとやまゝ通ツるまじり
りぬ又銚シと罽キんとしり人ありぬる鐵テツの楮ツあり

とくは縁を以ていつくし通をばとらざるなりと
口より言ふべきやうにうらむをばかしの人のれをば
と汝の縁を以て汝の措くくちをばとらむ
くちをば此匠をばとらむ 措く縁をばとらむ
面とあはせてゆりてやまなり しく言ふれば
凡のありきと縁措くゆくと尸子にきくは
日の本もよきと縁をばとらむとよき匠者
場とよきなり 當時匠者れ風俗をばとらむと

醫と云ふがゆゑのさるなり 其術をばとらむ
務口給ふありとらむとらむ 听便にばとらむ
とらむなり 名利をばとらむ 其術をばとらむ
措く縁をばとらむ 商人をばとらむ 夫匠の仁の術
くく人をばとらむのさるなり 故に易に所謂天地乃
大徳を生とらむ 蓋天地人をばとらむに其生命なり
言ふなり 其術をばとらむ 命をばとらむ 者ハ父母ありて
其命を司る者ハ君なり 又師とらむ 君父師の

權と傳のよめはらるらる醫し故子周禮子も
其の部子くわの蓋活人の
業みてまてぬをさすあをさし給とらふ
其術つてあす射は却と不仁とあるとせけぬとまふ
かのふらね仁の行るるをさす不仁のなをまふ
かのまふし給子も人とて悟るくは医とるるまふ
とらふ上非農者とを視てして聖威伊預
扁鵲倉公者婆仲墨華佗思遠といへる古の

世に名匠といはるるかの或は異人々まて天子の
宰相よりして諸侯まふまふといふ日のかりは
半天下少彦名命よりして和氣丹波の二宮
及ぶと我日本匠道の多岐なり和氣の垂仁
帝のまかりて丹波は漢の靈帝の後なりまふ
王子公孫赤子や又佛道もまてにけりまふ
教は天竺摩揭陀國の大王淨飯といふまふ
我朝より此道をつまひるのかき名僧志識と作れ

多し行^カ身^カ業^カ履^カと^カも^カら^カ良^カ報^カ傍^カ於^カは^カ大^カ
 限^カ以^カ爲^カ意^カえ^カと^カあ^カん^カ性^カ也^カ因^カ之^カ大^カに^カあ^カる^カ外^カ
 傳^カ徳^カ高^カ僧^カの^カ古^カよ^カも^カあ^カる^カ人^カと^カも^カ好^カを^カ確^カと^カる^カ
 小人^カも^カあ^カる^カに^カあ^カる^カ世^カ区^カ限^カと^カは^カ原^カと^カい^カふ^カ事^カ
 の^カ多^カし^カま^カあ^カる^カた^カの^カと^カも^カあ^カる^カに^カあ^カる^カ向^カの^カあ^カる^カは^カに^カあ^カる^カ
 多^カし^カま^カあ^カる^カた^カの^カと^カも^カあ^カる^カに^カあ^カる^カ向^カの^カあ^カる^カは^カに^カあ^カる^カ
 孤^カあ^カる^カに^カあ^カる^カた^カの^カと^カも^カあ^カる^カに^カあ^カる^カ向^カの^カあ^カる^カは^カに^カあ^カる^カ
 刃^カの^カよ^カも^カあ^カる^カに^カあ^カる^カた^カの^カと^カも^カあ^カる^カに^カあ^カる^カ向^カの^カあ^カる^カは^カに^カあ^カる^カ



哥麻呂画

後世に二層に名ある人こそ世に希うなりと云る
まゝにやまゝに南山の竹ハよん一と自ら直
ハ世の善あるれをうりいふ人の出づるは利智
りまゝかゝるに出家の事あるかのハ其國の五分
を或ハあるに性ありる倍の力とかりたてて後
まゝに俗弊を去るにまゝに學問と修行をせしむ
と切者よりまゝに後の行者の善ありしれりて
學問の功つりてりと作が同利とて玉目ハ

則ち其の難いともなるものち國目ハ石法花經
と起信論とを少めよあるを同く深きもの
四解とまゝに添伏と出るとの添伏とありて兼
けり添體は區別一と云々甚密察入りて
法部言某田の官人之令とまゝに添花經と起信
論とを碩學の出づるをうりて添味を添
まゝに度牒とらふ者ともまゝに度牒ハ唐氏の五枚
まゝに早免とて郡中姓何年何家誰か子弟

出家と許^ちけたりしものさきとて^ぢけ^ぶけ^んの友人
 の^らい^ば花押^{うま}を^らい^ばけ^んの^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと
 得^となる^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと
 誓^{ちか}し^くも^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと
 くれ^と虚^こを^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと
 交^か際^{さい}と^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと
 法師と^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと
 ず^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと
 師^しと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと
 ず^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと
 出家と^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと
 と^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと
 戒^{かい}定^{てい}惠^ゑの^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと
 ま^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと^らい^ばと

利欲と乍らして三毒の罪程少くとも俗乃
一たつと投よ捨つとくもわれども其まど用申り
あま玉の家も好し況乎とらぬも旅とて
昔朝の月には神代の子より名守りて世ると
のぞり利欲とゆくと今ととりて子孫お後
とくもりも神明の授し又仏道ハ天竺の教
ありて國ありてはよ旁格治世ありて大徳を
のむるもわれども思た父子のちちりて流すも

特とりのぎ怪ん甚しく或ハ淫洒おぼさる時
ハ父子兄弟のちちりてく畜類と犯しむす穢害むす相
のまふりこれまらて親をけれのみま位とす
この世の世の牙と捨ちてを欲とまられて悲
悲とれ世のあまきあまき多とらり三世の因果
としき悪業強熱の流しと流交りのよ當時乃
出れハ我體つとく淫洒さるる大者ハまどその
身ハ王公大人のよたにもつてあまきあまき

止

笑止ありあるりありかの俳在事業のこころ
の掛子も神の出来の法とてまのよめいふ
いふる者識しりともとの衆のぬのぶらりし
うの神宮のまきとて威のまきほのあはれ
又當時おむりともかくかの慶生房の捷評とて
亡國大まにうと給とある行国のうらりま
八百五の久きあは久唐とすれともるまの
ハ屋伝とありしあかの利とてあてあがしりし

角入の法のまきとて遠恨多れとあはれ
うらむくあるとうれしけにや小脇指長相あり
とあく一人を治されと自ら老日婆痴翁とてい
りしその薬あやまる時ハ知と一口の食一衣たき
よあててこがあやまらとかれは漢の大切なる人命と
あてあやまらういんや東坡が言も画とあはれ者
ハ紙と費し一醫者とあぶものハ人さうのやと漢書
曰病ありと治せりハ中醫者とあはれとこれやいふ

漢書のこち、病とまじりたる飲ざる中の醫と
りしりし、まじりしものより學者と云ゆらるる自ら
大醫方と稱し、素難の語を以て、ちんせんえの
病とまじりし一切理屈の如味か減りし効の
あまのり、當時の病も世にいつ、又盲にりりや
りからるるをまじりし、おとまじりしとまじりしと遠く
りしりし、まじりしは古方後世のりし、ありし、古方
病も後世の病とまじりし、ありし、古方

蛇蝎のどどど、
史記、神農炎帝の
流と汲ありしれを古と稱する、神農炎帝より古
ありし、古方の鼻祖と云、仲景、戦國の末、後漢乃
長沙の太守あり、建安年中、天下大に疫病を起り、万民
死するもの多し、其の宗族の獲矢し、救ふの術
を以て、自ら、憤鬱し、古訓を以て、炎帝内經と
稱し、則、傷寒雜病論とあり、万民傷を
救ふ、そのものを救ふ、その効、まじりし、後世ハ

この場を時^{とき}瘴^{しやう}を瘻^{ろう}するま古にさうり近^{ちか}は
多^{おほ}に我流我^{われ}の國^{くに}を先^ませの古方^{こほう}かありと
その門戸^{かど}と建^たてる人^{ひと}として^{して}古^こ神^{かみ}農^{のう}美^み帝^{てい}とさうり
聖^{せい}人の經^{きやう}書^{しよ}をよんでさう^{さう}の^の書^{しよ}とさう^{さう}の^の書^{しよ}
仲^{ちゆう}景^{けい}ハあう^{あう}か^かの神^{かみ}医^いする扁^{へん}華^か佗^たもその^{その}眼^{がん}下^か
ま^まん^んり^り一^{いっ}唯^い奇^きとさう^{さう}の^の人^{ひと}と疑^ぎ惑^{わく}は^は一^{いっ}大^{だい}吠^びを^をる^る大^{だい}
あ^あの^のあ^あい^いの^の門^{かど}の^のり^りの^の所^{ところ}を^をま^まる^るび^びな^なれ^れあ
と二^に三^{さん}年^{ねん}の^のら^らの^のま^まだ^だん^んも^もと^と年^{ねん}一^{いっ}ま^まま^まり^りと^とく

昔^{むかし}方^{ほう}よ^よら^らり^り表^{ひやう}裏^り虚^{きょ}実^{じつ}の^のら^らち^ちも^もあ^あら^らび^びや^やみ^みら^らの^の
血^ちま^まら^らう^うに^にま^まづ^づあ^あら^らぬ^ぬら^らう^うけ^けら^らう^うと^と欠^けき^き
其^{その}の^の亂^{らん}を^をさ^さう^うら^らに^に冥^{めい}途^との^の旅^{りょ}を^をあ^あら^らと^とく^く
只^{ただ}病^{びやう}ハ^ハ愈^{いよ}ふ^ふが^が命^{いのち}が^があ^あい^い死^し生^{せい}命^{めい}あり^り天^{てん}命^{めい}ハ^ハ醫^いの^の
あ^あら^らる^る亦^{また}に^にあ^あら^らび^びと^と億^{いっ}萬^{まん}を^を人^{ひと}の^の大^{だい}言^{げん}を^を吐^つち^ちら^らる^る
り^りあ^あら^らる^るま^まの^の事^{こと}を^をり^りし^しれ^れ司^し命^{めい}の^の二^につ^つら^らハ^ハ周^{しゆう}禮^{らい}を^を
物^{もの}く^く聖^{せい}人^{にん}の^の夫^{つま}死^しを^を救^{きう}ふ^ふ術^{じゆつ}し^しあ^あら^らる^るを^を醫^いの^のあ^あら^ら
ら^らる^ると^とふ^ふり^りと^とく^くの^の時^{とき}を^を先^ませ^せ出^いす^すら^らう^うの^の事^{こと}

田舎いんがのりおしりるる古方とさくりるるりるとと素す素す
ははりりりり醫いととままるるぶぶののままでももあるるいいややりりハハけけ取と
りりりりりり思し中ちゆう古方家こほうけれれ首魁すきけいととらら六元ろくげん祿年中ろくげんねんちゆう
名古なごをを玄げん醫い丹水たんすい先生せんせい仲景ちゆうけい傷寒きやうかん論ろんととままるるまま
りりの後ご後ご氏しととままるる先せん進しんとと世せにに行いりりるるのの丹水たんすい
先せん生せいのの瘡そうととるる西せいハハ外がい我われ作しやくままつつるる西せいのの古方こほうみみとと
今いま世せいにに用もちひひるる時とき重しゆう生せいのの古方こほうににああるる派はい古方こほうハハ汗あせ士し
世せい和わのの四法しほうよりより北きたににああるるととりり六ろく全ぜん杜と子しのの説せつとと
紙かみ古方こほう家けととくく我われ作しやくのの判はんりりままのの古方こほうににああるる仲景ちゆうけい
のの法ほうとと説せつととややりり四法しほうののいいんんききんんややりりるるいいんん
長沙ちやうさのの書しよににああるるととりり又またののいいんん田舎いんがににあありり
時ときりりりりりり醫いににああるる時ときハハ外がい宋そう朝てう以い母ぼのの法ほう世せいににああるる
まま近ちん世せいままるるいいんんのの古方こほう家けおお鄙びんとといいににああるるととままるる
ととままるるととままるるああららせせるる是ぜい非ひとと辨べんとといいふふととままるるととままるる
ううとといいふふとといいふふとといいふふ京師けいしののあありり吾師ごし鳴鶴めいかく先生せんせい乃なり
山さんににああるるとといいふふとといいふふとといいふふ先生せんせい毎朝まいてう講かうととるる不ふのの書しよハハ

則百今の醫^い生^ま祖^そとらるふの黃帝^{くわうてい}内^{ない}經^{けい}ありませ

今日用^{もち}むる^ふの方^{かた}書^{しよ}ハ仲景^{ちゆうけい}傷^{しやう}寒^{かん}論^{ろん}金匱^{きんきん}要^{えい}略^{りやく}

とらる^{とらる}魏^ぎ華佗^{くわた}青囊^{せいなん}方^{かた}中藏^{ちゆうざう}經^{けい}東晉^{とうしん}葛^か

洪^{こう}肘^{しゆう}后^{こう}方^{かた}劉涓子^{りゅうけんし}鬼^き遺^い方^{かた}姚僧垣^{やうそうげん}集^{しゆ}驗^{けん}方^{かた}僧^{そう}

深^{しん}澤^{たく}師^し方^{かた}陶弘景^{たうこうけい}本^{ほん}艸^{そう}集^{しゆ}注^{ちゆ}巢元方^{せうげんかた}病^{びやう}源^{げん}候^{こう}

論^{ろん}孫思邈^{そんしやう}千^{せん}金^{きん}方^{かた}及^{およ}千^{せん}金^{きん}翼^{よく}方^{かた}甄權^{せんけん}脉^{まく}經^{けい}

甄^{せん}立^{りつ}言^{げん}古^こ今^{こん}錄^{ろく}驗^{けん}玄宗^{げんそう}皇^{こう}帝^{てい}廣^{くわう}澤^{たく}方^{かた}謝^{しゃ}士^し泰^{たい}

刪^{せん}繁^{はん}方^{かた}王^{わう}素^そ外^{がい}臺^{たい}秘^ひ要^{えい}と^との^の外^{がい}丹^{たん}水^{すい}先^{せん}生^{せい}の^の家^かの^の

家^かの^の書^{しよ}よ^よて^ては^はと^と方^{かた}書^{しよ}ハ^ハ事^じあり^{あり}ぬ^ぬち^ちり^りて^て古^こ方^{かた}

今^{こん}ち^ちと^とら^らる^るて^てら^らと^とあ^あら^らる^る古^こ今^{こん}の^の方^{かた}と^とら^ら

ま^まを^を用^{もち}ひ^ひら^らる^るハ^ハ何^{なに}事^じと^とや^やこ^これ^れと^と名^な付^つて^て何^{なに}と^とら^らん

何^{なに}の^の仁^{にん}の^の術^{じゆつ}と^とら^らん^んと^とれ^れも^も不^ふ仁^{にん}の^のを^をと^とら^らん^んハ^ハ推^{すい}り

家^か解^{かい}ハ^ハあ^あら^らる^るの^のを^をと^とら^らん^んと^とき^きこ^こら^らん^んも^も好^{この}む^むる^るに^にハ^ハ

い^いろ^ろれ^れの^の舞^{まい}足^{そく}の^の踏^ふみ^みと^とら^らん^んに^に抵^{たい}國^{こく}を^をし

の^の白^{はく}狐^こと^とら^らん^んに^にハ^ハ形^{かたち}の^の學^{がく}問^{もん}の^のが^がり^りつ^つら^ら日^{にち}

の^のま^まも^もり^りと^とら^らん^んに^にハ^ハ玩^{がん}湘^{しやう}の^のあ^あら^らん^んと^とら^らん^んに^にハ^ハ

りー山吹の花も一年のまをたごちりて百年の
ヲとまやまうあゝあゝ六根も六塵のちまけ
その間の宿醒もやしく夜明のらにりてと
より師家のにほましく心と古書も潜るまは年
ちりといへどもかの無患子ハ三年磨でも黒
ソも鈍才もれまはしく仁の仁にりるをさる
いりて不仁の仁とさぶとれ醫者に愛あり
聰明達理もあゝいんむ任どべりてりるの上

いりて君羊昏に流るるまはれ人も及み故も
野夫醫者の教原もまて出ん筈もあまが野夫
とあゝんとして不仁の沙汰のうまうあま中づく庸醫
のまに非業の死と遂る事溢疫と食傷の二症
まあり此二症の毒のほまの時刻とらるるに
あゝの掌とるんまてりて此時後世に柔劑と
かんて救いごとく先飲食のまにやがしそのま
不消とま胸腹の内苦痛もるる劔と以て割が如

これと吐^ひぐも物^{もの}ぞよと浮^うえんとされよ
が六脈^{ろくみやく}とくも氷のくく人^{ひと}のきき
ちうとほ世^よの家^かに先^まえをぬと後^{あと}しく一^{ひと}方を
喉^{のど}んとく人^{ひと}参^ま附^り子^こを用^{もち}申^まる^る頻^{しばしば}ありし
華^{はな}のまきが在^あ胃^い中^{ちゆう}に停^と洋^{やう}しく拘^く扱^{かく}の中
うなく若^{わか}く時^{とき}射^{しゃ}の中^{ちゆう}のこれ死^しは弊^{へい}るもの
これら其^{その}治^ちの通^と達^{たつ}しく申^まる^るもあるが故^{ゆゑ}
なりけりよある病^{びやう}の用^{もち}申^まる^るは病^{びやう}から結^{けつ}急^{きゆう}

或^{ある}は太^{たい}承^{じやう}氣^きの氣^きと以^{もつ}て其^{その}主^{しゆ}母^ぼと吐^ひ下^げは
と速^{すみ}なり脈^{みやく}絶^{てつ}もき冷^{ひや}るものハ毒^{どく}物^{ぶつ}は
よきて陰^{いん}陽^{やう}升^{しやう}降^{かう}の氣^きあがる候^{こう}しこるは
大^{だい}其^{その}の毒^{どく}を用^{もち}てその毒^{どく}と吐^ひりて諸^{しよ}症^{しやう}を
陰^{いん}陽^{やう}の二^に氣^き升^{しやう}降^{かう}しく下^げ通^と達^{たつ}しく多^たく候^{こう}と
理^りをてし脈^{みやく}は二^に才^{さい}ありしなり水^{みづ}何^{なに}の中^{ちゆう}に候^{こう}
氣^きのゆるみぬしりの微^み度^たのどきき二三^{にさん}は
しく敬^{けい}のものハ毒^{どく}其^{その}を以^{もつ}てなり

一口の効矣悉付事らうと云う再三或ハ四五を

よ及するよりその時難るの方と以て一リにせ

るべき事ありや一以の時緩劑とかりいひ

邪を驅つてゆく事ありぬむ熱毒裏より

その毒あるより火に返りて如く五臓骨肉熱

毒のよみに煙と舌赤唇赤き一面赤あつと

も便や血して粗人のごとくまらふ或ハ月血

と手熱皮膚毛黒大は厥逆の候候

剛絶してやと苦む事と其毒を浮さん

と人参附子と野芋用申は六月寒天よ火

と以て炮するなり或ハ湯黃連黃芩の

やうきと防ごもすれども是一滴の水と以て

火を炙るなり鼻叫喚焦熱地獄の

くろしにてつあはれ死すや骨ハ焦らる

とあること如人参附子の害とありて一を

と云ふ其治の申りやあはれ故あり真の古方

家のよに介一の此めを至く石膏芒硝
大黃の寒薬と用ひて其熱毒を去ると速
みし其毒も去りて黑白の相違あり内經に
所謂熱淫所勝治以寒涼といふそのし
これハのどくくの急症をうつやりの病と雖一
その功と奏せしむるは異に録し
載とさく又當時後世の病と移るるありて
唯攻劇その用申すべしといふ其甚愚也

その変化を察するにれと名醫といふの
先生の門下朝夕攻撃とこのみま
天めんをこれとめまさらんやりの邪氣
考らざるにえりて瀉補の薬を用申す
邪を去りて正氣を養ひて或は煩
しあるは熱一骨蒸といふもの
参附のさるをいひ彼人参ハ元氣となす
いふと便に医者も素人ともれ人参と

小治がやまぬ人參ハ靈藥とてこれと
 用るに時あり野夫醫酉のよく用るといふは
 風俗文選乃俳人さら人參の利害と
 論を醫酉としてこふとあるものありぬ
 さらりの醫者うらちんと俳人宗匠と
 さらるべしや

